

# 近代における水田の災害復旧

## Disaster Recovery of Paddy Field in the Modern Period, Japan

赤石 直美

Naomi AKAISHI

### 1. はじめに

近年、農村景観は歴史的・文化的景観として捉えられ、その維持や保全活動が注目されている。しかし、記録的な集中豪雨や相次いだ地震などの災害により、農村景観を形成する農地・農業用施設は大きな被害を受けてきた。災害が多い日本では、このような災害による被害と、それに対する復旧を繰り返しつつ、農村景観は維持されてきたのである。

それら農村景観の一部を形成する水田は、長期的な人間と自然環境との関わりのなかで、形成されてきた景観とされる<sup>1)</sup>。災害からの復旧を、洪水や地震といった自然環境の変化への対応と捉えるならば、水田の災害復旧に着目することは、水田景観の形成史を捉えるうえで重要な課題と考える。

本稿では、日本の近代を対象として、水田における災害復旧について、聞き取り調査で得られた内容をもとに、簡単な考察を加える。

### 2. 過去の災害復旧に関する研究の動向

災害からの復旧を取り上げた研究については、現在を対象としたものでは、多数の成果がみられる。しかしながら、過去の災害の場合に着目したものは必ずしも多くない<sup>2)</sup>。復旧技術という面から、民俗学の動向をみても、本稿が注目するような農地の復旧技術を取り上げた成果は、管見の限りみられない。そこでは、稲作の耕作技術の特徴や地域的相違に関する分析にとどまっている。伝承や聞き取り調査を通して、過去における農地の災害復旧方法を把握することは、先述したような水田の開発史、さらには農村景観の形成の一部として意味があろう。

さて、このような動向のなかで、水田開発問題を取り上げた竹内常行によって、農地の復旧方法が若干報告されている<sup>3)</sup>。本稿は、この報告を踏まえつつ、聞き取り調査を実施した。

### 3. 昭和 20 年代の災害復旧方法

まず、竹内の報告から、明治時代末期の水田の復旧方法を図 1 にまとめた。図 1 によれば、まず荒地から土砂を取り除き、元の水田を掘り起こす作業から始まる。続いて、掘り出された水田に砂礫を埋め、さらに漏水を防止するため滲透性の少ない赤土を入れている。そこに、耕作土となる砂を入れて、復旧作業が完了した。竹内によれば、明治時代末期には、このような復旧事業に対して政府の補助金はなく、ただ 15 年間の免租であったとされる。

一方、本稿では、1950 年前後に水害を経験した農家に聞き取り調査を行なった<sup>4)</sup>。それは、図 2 のように表現される。まず、被災した水田の土砂や礫といった堆積物を取り除き、もとの耕作面が掘り出されたという。この堆積物は、洪水によってえぐられた部分に入れられた。また、棚田など被害を受けなかった水田の耕作土が、堆積物を取り除いた後の水田に入れられた。

これらの作業は農閑期である冬季に、家族総出で行なわれた。こうして復旧された耕地において、元の収穫量になるまで、3~4 年かかったとされる。何より、このような被災農地の復旧に対し、補助金などの援助は受けていなかったようである。

本稿での聞き取り調査と、図 1 の内容と比較すると、堆積物を取り除いた後に耕土となる土を入れている点など、細かい内容は違うものの、大きな作業の流れが共通している。明治時代末期と昭和初期とで、復旧方法に大きな違いはみられないといえる。

近代では、それぞれの農家による地道な 努力によって、水田の災害復旧が行なわれていた。

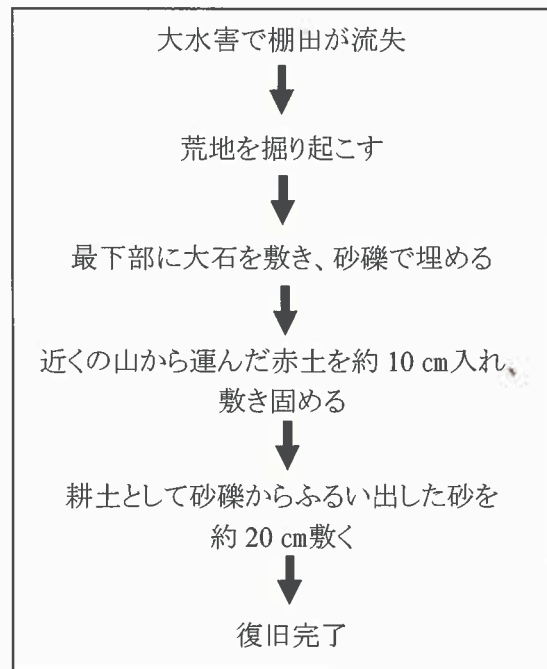


図 1 明治時代末期の水田復旧方法  
(竹内常行『続・稲作の発展基盤』より作成)

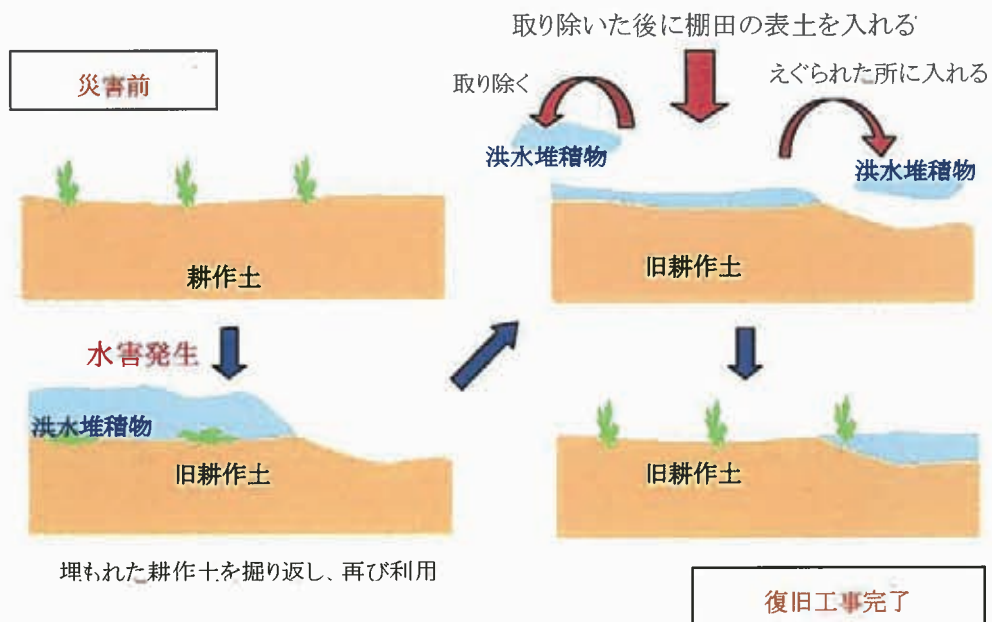


図 2 昭和初期における水害復旧の模式図

#### 4. 近代の災害に対する行政の対応

前章で述べたように、水田の復旧作業は各農家によって個別に実施され、特に行政からの援助はなかった。しかしながら、例えば昭和 10(1935)年 6 月 29 日に、京都市及びその周辺で発生した水害では、『耕地復旧事業台帳』<sup>5)</sup>が作成されており、行政から復旧に対して少なからず援助があったようである。

昭和 10(1935)年の水害による京都府下の農用地・農業関係施設の総被害額は、約 410,000 円であった<sup>6)</sup>。その詳細をみると、水田の被害面積は 14,922 反、被害見積価格は約 197 万円、畑の被害面積 16,699 反、被害見積価格は約 26 万円であった。その他、溜池や水路といった農業関係施設の被害もあったことがわかった。区町村別に被害状況を見ると、京都市、愛宕郡、桂川上流部の南桑田郡・北桑田郡周辺において被害が集中していた。これは、鴨川と桂川が氾濫したことによる。

そこで、桂川周辺にあたる、京都市右京区の『耕地復旧事業台帳』の内容をみていきたい。この台帳には、耕地や畦畔をはじめ、溜池、水路、井堰、農道の復旧に費やした補助金額が、申請のあった事業毎に記されている。京都市右京区では 74 件の申請があり、そのうち溜池・水路・農道・井堰は公共の施設の復旧事業として取り扱われていた。申請された年度は、1936(昭和 11)年～1938(昭和 13)年の間で、工事日数をみると 10 日の場合もあれば、半年を要したものもあった。

事業毎にその内容をみると、事業申請者をはじめ、事業主体の所在地、事業施工者・施工者員数・工事の対象・申請日・着工日・工事完了日・経費・補助金額が記され、工事に関わった人数や費用、工期を具体的に知ることができる。

例えば、京都市右京区の Y の申請した内容は、申請した日が昭和 11(1936)年 1 月 13 日で、田を工事の対象としていた。被災してから約半年が経過していた。この工事に関わったと考えられる施工者員数は 9 人であった。この工事に着工した日は、1936(昭和 11)年 3 月 13 日であった。申請してから工事まで 2 ヶ月かかり、工事が完了した日は昭和 11(1936)年 3 月 31 日となっていた。およそ半月の工事で復旧が完了したようである。この工事の工費は約 137 円、補助金額は約 46 円であった。すなわち、約 30%の補助を得ていたことがわかった。

一方、水利組合でも水路と井堰の工事が申請されていた。補助申請された日は 1936(昭和 11)年 1 月 20 日で、これも被災してから約半年が経過していた。施工者員数は記されていなかった。工事に着工したのは、昭和 11(1936)年 3 月 2 日であり、工事が完了したのは昭和 11(1936)年 8 月 20 日であった。水路と井堰の工事であったためか、工期は約 5 ヶ月を要していた。水路の工費は約 2,350 円で補助金額は約 1,175 円、井堰の工費は約 4,250 円で補助金額は 1,816 円であった。この工事に対しては、総工費の約半額が補助された。

以上のように、昭和 10(1936)年の京都府下で発生した水害からの復旧に対して、行政は補助金を出す形で対応していた。耕地や農業関係施設における災害復旧は、家族で行なわれた一方で、金額に違いがあるものの、昭和初期には行政も復旧に対する金銭的援助を行っていた。

## 5. おわりに

本稿は、過去における災害からの水田の復旧方法を、先行研究と聞き取り調査をもとに検討した。先行研究で明らかにされた、明治時代末期の水田復旧は、1950年前後に災害を経験した農家に行なった聞き取り調査の内容と類似していた。それは、土砂や礫といった堆積物を取り除き、もとの耕作面を掘り出して、耕作土を入れて水田を復旧するというものであった。その際、補助金などの行政からの援助は受けていなかった。近代における水田の災害復旧は、各農家によってそれぞれ行なわれてきたことが明らかにされた。

ところで、この復旧方法は、中世や近世末期の被災耕地復旧の方法とも類似している<sup>7)</sup>。近代にみられたこのような復旧工事は、時代を経てもあまり変化していなかった可能性がある。いずれにせよ、近代では、農家の地道な努力により被災農地は復旧され、今日の水田景観が維持されてきたと推察されよう。

一方、昭和初期の京都府下で起った水害に対しては、耕地復旧に対する補助が行政により行なわれていた。今後はさらに、他の地域における災害復旧に関する聞き取り調査に加え、事業台帳のような、行政の復旧の実態を捉える作業が必要である。さらに、ここ数年環境に対する価値観が変化したものの、農業の衰退が進む今日では災害を機に離農してしまう農家があると考えられる。そういった現在の問題に過去の経験はいかに貢献できるのか、これらもまた今後の課題である。

### 【脚注】

- 1) 古島敏雄『土地に刻まれた歴史』、岩波新書、222p、1967年
- 2) 北原糸子『磐梯山噴火 災異から災害の科学へ』、吉川弘文館、284p、1996年  
北原は、災害復旧・復興まで視野に入れた、歴史災害研究を展開している。
- 3) 竹内常行『続 稲作発展の基盤』、古今書院、pp.117、1984年
- 4) 京都市右京区に在住する75歳の専業農家(調査当時)
- 5) 京都府『耕地復旧事業台帳』、1935年
- 6) 京都府『昭和十年 水害被害調(農産物等ノ被害)』、1935年  
京都府下の被害額は、この文書による。
- 7) 河角龍典「沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人間活動—大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例」、歴史地理学 42-1、pp.1~15、2000年